



アズビー・ブラウン著『江戸に学ぶ エコ生活術』「はじめに」より

日本の例が多く示唆に富むのは、環境崩壊の危機を回避したからこそだ。

江戸時代初めには、建築用の材木が不足したために多くの山が皆伐されて丸裸になった結果、土壌浸食や川流域の破壊が起きた。また人口の増加に農業生産の拡大が追いつかなかった。都市の住民のニーズと農村の住民のニーズとが対立。農民は武士階級を支えるために年貢を納めなければならないため、ますます生活が困窮した。

日本には、環境と自然資源の点でプラスとマイナスの両面があった。国土は山が多く耕作に適した土地は海岸沿いのわずかな平野と狭い溪谷のみ。それらをすべて合わせても国土の四分の一しかなく、耕作可能な土地はすでにほとんどが農地となり、1200万人の人口をかるうじて養っている状態だった。多くの地域では地力が衰え、生産量が落ちていた。

一方で温暖な気候と暖流に恵まれ、雨量は豊富で、作物を栽培できる期間が長い。大量の雪解け水は急流となり、多くの肥沃な溪谷や湿地を潤す。山々を覆う広大な原生林にはさまざまな広葉樹や針葉樹が生い茂り、多様な植物や動物が豊かに生息している。

こうした自然の恵みは人間が暮らしやすい環境をもたらしていたが、1600年代初頭の日本は人口増加による土地や資源の乱開発に苦しんでいた。

ところがそれから200年後、この国は環境の劣化の兆しをほとんどみせることなく、2.5倍の3000万人に膨れ上がった人口を養っていた。

森林破壊は止まって回復に向かい、農地は改良されて生産性を増し、都市であれ農村であれ、社会のあらゆる領域で資源保護のための努力が行われていた。国民全体の生活水準は高まり、人々の健康も増進した。これはどんな客観的基準からみても注目すべき快挙であり、おそらく後にも先にも、また世界中どこを探しても、匹敵する例はないだろう。

この成功の陰には、技術の進歩とともに幕府や諸藩の政策も確かにあった。品種改良や水文学の進歩も貢献したし、優れた設計技術や迅速な情報の収集と伝達も不可欠な要因だった。

だが何よりも大きかったのは、この国に広く浸透し、あらゆる改善を導く原動力となった人々の精神的態度である。それは自然のメカニズムと、自然の本質的な限界に対する理解に根ざしたものの。謙虚さを尊び、浪費を嫌い、協力による解決を求め、一人ひとりが必要な分だけを手に入れ決してそれ以上を求めない。そんなすばらしい生き方に意味を見いだし、満ち足りた気持ちになれるのだ。

アズビー・ブラウン著 『江戸に学ぶエコ生活術』 幾島幸子訳 CEメディアハウス 2011年



長沢芦雪 《那智滝図》(部分) サンフランシスコ・アジア美術館